

書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告

平成 17 年 10 月

書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト

目次	
1. はじめに	1
2. 課題検討プロジェクトの設置と活動	1
2-1. 活動報告	
2-2. 中間報告	
3. 大学図書館における運用の現状	3
3-1. 国立大学図書館における運用	
3-2. 私立大学図書館における運用	
4. 中間報告への対応	6
4-1. 国立大学図書館における対応	
4-2. 私立大学図書館における対応	
4-3. NII における対応	
5. 課題解決に向けて	9
別紙：プロジェクトメンバー一覧	
活動報告	

1. はじめに

書誌ユーティリティとは「国または地方レベルの総合目録の作成，維持，提供，利用を中心とした情報システムのサービス，またはその提供機関」である。

国立情報学研究所（以下，NII）の目録所在情報サービス（NACSIS-CAT/ILL）は，日本で唯一の書誌ユーティリティであり，大学図書館を中心に 1,000 を超える機関が参加し，図書館の業務システムをサポートすると共に，我が国の学術情報流通基盤を支えるサービスシステムである。NACSIS-CAT/ILL は，全参加館の「共同構築」によって支えられ，その理念の下，現在まで 20 年余りの間運用されている。

NACSIS-CAT は，「国レベルの総合目録」を構築するためのサービスシステムである。現在，書誌データは図書が約 750 万件，雑誌が約 28 万件，所蔵データは図書が約 8,000 万件，雑誌が 410 万件を数える我が国有数の総合目録である。NACSIS-CAT の特徴・理念は，「書誌共有型のオンライン共同分担目録方式」の採用にある。これは目録の作成・維持を各図書館で個別に行うのではなく，オンライン上で共同分担することにより，全体の作業量を軽減し，より高品質な総合目録の構築を目指すものである。

また，NACSIS-ILL は，NACSIS-CAT で作成された総合目録を利用して，図書館間で所蔵資料の貸借・複写（ILL）をサポートするシステムである。ILL は，「学術情報資源の共有」の理念の下，NACSIS-ILL システムの稼動以前から，広く行われてきたものだが，NACSIS-CAT との連動により飛躍的に利用が増えた。（平成 6 年度は，約 50 万件的現物貸借・文献複写件数であったものが，平成 16 年度では，約 120 万件となっている。）これは，所在情報を含む総合目録がいかに有用であるかを如実に示している。もっともこの発展は，総合目録の有用性だけでなく，「相互利用依頼に対しては，それぞれの大学図書館が定める範囲において，可能な限り依頼に応じるものとする」（「大学図書館間における相互利用要項」平成 16 年）という大学図書館間の相互協力基盤も大きな要因である。

しかし，近年 NACSIS-CAT/ILL の「共同構築」，「学術情報資源の共有」という基本的な理念の衰退が疑われる現象が起きている。図書書誌レコードの重複率の上昇に代表される総合目録の品質の劣化，雑誌所蔵レコードの未更新率の上昇，ILL の謝絶率の上昇に見られる ILL サービスの品質劣化等である。これは，利用者の図書館サービスへの信頼性，及び図書館自体のサービスの業務効率の両方を損なう恐れのある極めて重大な問題である。そこで，この問題に対処するため，「国公立大学図書館協力委員会常任幹事会と国立情報学研究所との業務連絡会」の下に「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト」を設置し，検討を行うことになった。本報告書では，大学図書館の現状分析を踏まえ，NACSIS-CAT/ILL の課題に対する検討内容をいくつかの提言を併せ，報告する。

2. 課題検討プロジェクトの設置と活動

「平成 16 年度第 1 回国公立大学図書館協力委員会常任幹事会と国立情報学研究所との

業務連絡会」において、「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト」の設置が承認され、大学図書館及び国立情報学研究所の教職員をメンバーとする本プロジェクトが立ち上がった。

2-1. 活動報告

平成 16 年 9 月から平成 17 年 8 月までに 3 回の会議を開催し、以下の活動を行った。

まず、課題の現状を俯瞰するために、実際の利用実績による大学図書館全館の分析を行い、次に課題の背景にある各図書館の現状を知るために、特定館に対する訪問調査を行った。

その結果、自館の努力により、書誌ユーティリティの運用に対して高度なモラルを維持しながら業務を進める参加館がある一方、多くの参加館で、人員削減・業務統合等の環境の変化に伴い、目録や ILL の業務レベルを低下させていること、そして、本来 NACSIS-CAT/ILL はどうあるべきかの理念自体の認識がない参加館の存在が浮き彫りになった。

(1) 数値的分析

NACSIS-CAT/ILL の業務状況の全体像をつかむために、平成 15 年度の統計を元に以下の各項目について分析を行い、実数値と併せ参加館の国公私別及び規模別の指標（それぞれについて、平均値との標準偏差により 0 から 5 の 6 段階評価）を算出した。

この分析結果を表及びグラフの形式にまとめたものを、各機関の現状の把握及び課題の検討を行う参考のため、「NACSIS-CAT/ILL 業務分析表」として、各国公立大学図書館に送付した。

- ・ 図書書誌：新規作成件数・重複レコード作成件数・削除予定レコード作成件数
- ・ 図書所蔵：累計件数・新規登録件数
- ・ 雑誌所蔵：累計件数・「+」付所蔵件数・未更新件数
- ・ ILL：複写貸借受付総件数・複写貸借謝絶件数・複写貸借受付所要日数・サービスステータス（ON/OFF）切替回数

(2) 訪問調査

平成 17 年 1 月から 2 月にかけて、プロジェクト・チームでは、重複書誌、雑誌所蔵更新率などについて、全国 15 大学への訪問調査を実施した。この訪問調査は、数値的分析による指標結果を、聞き取り調査による現場の状況と照合し、NACSIS-CAT/ILL の現状と問題点について整理・分析するフィールドワーク的作業であった。そしてこのフィールドワークは、次段階の課題解決の方策検討を行なうために必要な基礎的作業として位置付けられるものとなった。なお訪問調査を補完するものとして、電話、メールによる聞き取り調査も実施した。

2-2. 中間報告

以上の数値分析・訪問調査をもとに、平成 17 年 4 月、「課題検討プロジェクト中間報告」を発表した。

(URL:http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/ncat_info_kadaiPT-interim-report.pdf)

この中間報告では、課題の解決のための応急策 6 項目の提示を行った。

3. 大学図書館における運用の現状

訪問調査の結果判明した NACSIS-CAT/ILL の運用の現状を、国立大学図書館と私立大学図書館を中心として、以下にまとめた。

3-1. 国立大学図書館における運用

国立大学は 7 つの図書館への訪問調査を行った。国立大学は、平成 16 年度から法人化され、このことは今後、有形無形に影響を与えてくるものと思われる。

(1) NACSIS-CAT 運用全般

国立大学では、従来から遡及入力、非常勤職員・外注によっているケースが多くあったが、近年は、専門性が高いとされてきた通常目録業務も、非常勤職員・外注（派遣）に依存する大学が増え、目録作成能力の継続・維持に懸念を表明する大学も少なくない。更に法人化後は、図書館担当組織と学内情報系組織等との統合・再編による業務の重点のシフトが生じ、また従来の「図書系職員」区分を廃止する大学もあり、更に人員縮減圧力の高まりや、非常勤・外注についても要件や仕様から専門性や実績の排除が経理担当から求められる等、従来の国立大学では一定程度保たれてきた目録作成能力の低下を招く動きが急速に進行している。今後、この影響が顕在化することが強く予想され、研修等の人員確保・育成方策や、歯止めとなる（外注や非常勤職員の雇用要件の）基準等の整備と公表が急がれるところである。

(2) 図書重複書誌

重複書誌を多数作成している大学においては、遡及入力の際に多く発生していると認識している大学が多い。他方、書誌調整手順の煩雑さと書誌作成能力の低下から、新規書誌の作成を控え、他館による書誌作成を待つ、ローカル目録にのみ書誌を作成するといった動きも一部であるが生じていることが懸念される。

(3) 雑誌所蔵未更新

高い雑誌所蔵更新率を保っている図書館は、図書館システム機能（受付から所蔵へのデータ変換、所蔵データの NACSIS-CAT へのアップロード）の定期的な運用によっているケースであった。逆に、更新率が低い場合の多くは、図書館システムがこれらの機能を有していない場合や、有していても適切な運用を欠いている場合が多く、今後、システムメーカーへの機能搭載要求や、適切な運用を行っている模範事例の公開なども必要であると考えられる。そのほか、一部であるが資料所在の変

化に所蔵情報の更新が追隨していないため更新が遅れているケースがある。

以上のほか、(国立大学だけではないが) 学術雑誌総合目録の冊子刊行時代に設けられていたデータ更新の期限がなくなったため、更新するきっかけがなくなったという面があるものと思われる。

(4) NACSIS-ILL 運用全般

ILL のサービスステータスの頻繁な切り替え、サービス時間の低下については、現場の判断で、担当者の不在時や退勤時に OFF とする等が行われ、必ずしも館として認識されていない状況が見られていたが、昨年の国立大学図書館協会総会のワークショップで NII から実態の報告が行われ、その後、大きく改善されている。(なお、このことは、公私立大学でも同様であって、改善傾向が改悪傾向を大きく上回っていることが数字上でも確認されている。) なお、料金については、改定した一部の大学を除き、従前の料金体系を持ち出し料金であると認識しながら種々の理由から法人化後も継承しているところが多い。

(5) NACSIS-ILL のリクエスト謝絶理由

謝絶理由の最大の要因は、研究室所在資料の管理が研究室・教員に委ねられ、研究室外(学内・学外)からの共同利用がしにくいことである。また、関連して、研究室所在表示を各 OPAC のみに記載し、NACSIS-CAT 上では、大学名のみのもので表示としている大学も少なからずあり、このことが謝絶率の一層の増大を招いている。後者については、研究室所在を新たに CAT 上で表示(LOC を設定)するよう転換した大学もあるが、問題の所在を承知しながら対応できない大学もある。残念ながら資料所在の変更に目録情報の更新が対応できていない大学も見られる。また、自館の謝絶率が高いことを管理者・担当者が自覚していないケースもみられた。このような点についても他館の謝絶率や標準数値の公表や、優れた業務事例の公開が改善に資するものと思われる。

3-2 . 私立大学図書館における運用

私立大学は、7つの図書館への訪問調査を基に具体的な問題点の分析を行っている。この他 10 大学への聞き取り調査も行った。その結果から見えてくる私立大学図書館の現状は以下のようなものである。

(1) NACSIS-CAT 運用全般と図書重複書誌

NACSIS-CAT については、人員削減された部分を補うために低コストでの外注化が進んでいる。外注仕様書を作成する人材がない状況や、コスト面での制約のため、NII 書誌作成基準に準拠する外注仕様書の作成が難しく、データベース維持に必要な条件を外注仕様書に設けることができない場合も見受けられる。業者選定については、合見積りが一般的であり、価格的に安価な業者に落札される傾向にある。業者は営利企業であるから、適正な利潤を生み出せない事業対象とする意味がな

くなり、結果として外注業者においても人材が育つ土壌がなくなるという状況に陥る。

たとえば、外注業者が登録した書誌レコードの品質に問題がある場合がある。本来は、外注業者が書誌レコード登録の前後にその内容について精査点検を行うことが誠実な契約の履行と思われるが、コスト面での制約があるため、適切な精査点検を行う余裕のない仕様になっている場合も多く見られる。やむを得ず専任職員により品質の点検を行う必要が生じてくるが、その技能が不足していることや、人員不足で行えないことが多い。結果として、重複書誌が発生し、一方では書誌修正やレコード調整まで手が回らない状況に陥っている。

(2) 雑誌所蔵未更新

雑誌所蔵データの未更新の問題については、定期的に更新を行う図書館がある一方で、人員に問題があるため手を付けずにいる図書館や、更新機能を持たないシステムを使用している図書館などが見受けられた。

(3) NACSIS-ILL 運用全般

NACSIS-ILL については、業務量の増大を現場の担当者の判断で回避し、サービスステータスを OFF にするという事態が現実存在している。あるいは外部から指摘されて初めて、本来あるべき姿勢に気が付いた図書館が存在する。

単科大学では、新設校の急増により、同一主題の既設校へ一時的に ILL 依頼が集中するという事態が見られた。しかし NACSIS-ILL が互惠の原則の上に成り立っていることを認識し、最大限の努力を惜しまない図書館も存在している。

増大する NACSIS-ILL 業務を遂行する余力があるかどうかは、図書館の運営方針にもよるが、より単純化していえば規模の大きさによる。しかし小規模大学であっても、ILL 活動が学問研究の基礎を成す重要な支援業務であるという組織としての認識のもとに、互惠の原則に立って業務を遂行しているところもある。

(4) 問題点の背景

以上の問題点の背景には、各参加館、各担当者の共同構築・相互利用という理念の理解度と、図書館としての運用の方針、現場の運用方針、各担当者の意識の低下、組織文化などが複雑に交錯している。これに加え、私立大学は、NACSIS-CAT/ILL の掲げる理念に対し、自ら応分の貢献をすることに賛同する姿勢が、国公立大学の図書館に比べ相対的に低いことが推察される。

NACSIS-CAT/ILL は、共同構築・相互利用という理念を捨て、自組織の論理を重視することに徹すれば、コスト削減、負担軽減などに多大な貢献をする。大学経営者とその理念をメリットとして評価する社会的仕組みのない現状では、図書館は、経営資源の投入対象ではなく、人員削減、低コストでの外注化の対象となっている。その結果として、図書館における目録業務、相互貸借業務の必要性の希薄化・職員のモチベーションの低下等の悪循環が発生していると推察される。

私立の大学，短期大学は，一括りに論ずることはできない様々な規模，財政状態，経営形態にあり，共同構築・相互利用の理念を理解しながらも，即時に経営資源を投下できない状況や，その理念の実現を経営者に要求できる仕組みになっていない状況は十分に考えられる。

4. 中間報告への対応

4-1. 国立大学図書館における対応

(1) 各地区での検討

国立大学では，平成 16 年の国立大学図書館協会総会の第 1 ワークショップにおいて，NACSIS-CAT/ILL の課題についての報告・協議の場を設けていたことから，比較的早い段階からこの問題についての認識を持っていた。本プロジェクトの中間報告は，各大学に送付され，あわせて，協会事務局から，4 月に開催される各地区協会（北海道～九州，9 地区）に，NACSIS-CAT/ILL の課題，主に 6 つの事項に対して，協議と地区意見集約が求められた。

各地区協会での検討結果は，地区として統一的なものではなく，概ね次のとおりであった。

サービスステータスの切り替え

本来の趣旨からすれば著しい切り替えは不適當であるが，現実には一定程度の ON/OFF を認めざるを得ず，全く認めない場合，かえって参加館全体としての円滑な ILL リクエストの処理が阻害されるとする意見が多く提出されている。

ILL の受付を行わない図書館への特別料金の設定

これについては，ILL の趣旨や事務手数等の点から賛否が分かれている。この種の図書館に NACSIS-CAT/ILL への参加を認めるべきではないとの意見や，料金設定は各参加館のポリシーである等の意見が出されている。

雑誌所蔵更新への NII の強制力

強制力を持たせることへの賛意が多数である。一部に強制力を持たせることによるマイナス結果の懸念を表明する意見もある。

図書書誌レコード調整の新たな方式

レコード調整の簡素化の意見が多数であるが，作成館責任原則維持や重複原因調査の必要性を指摘する意見も出されている。

NACSIS-CAT 外注への標準仕様書，業者への教育・研修

外注業者への標準仕様書，教育・研修の必要性を確認する意見が多数であった。

図書館職員への資格認定制度

図書館職員への教育の必要性は共通しているが，認定制度については意見が分かれ

慎重な検討の必要性が指摘されている。

(2) 国立大学図書館総会・ワークショップと決議

同協会は、平成 17 年度の総会（平成 17 年 6 月 30 日）において、中間報告と各地区での意見を踏まえ、ワークショップ C「NACSIS-CAT/ILL の課題解決に向けて」を開催した。ワークショップでは、地区の意見のとりまとめと改善の方向について東京大学附属図書館笹川事務部長から報告・提案があり、NII 開発・事業部茂出木コンテンツ課課長補佐から本プロジェクトの活動と中間報告について報告があった。協議の結果、各地区で意見が分かれた点については、サービスステータスの切り替えは「館としてのレンディング・ポリシー」を確立する、料金については「各館のポリシー」に委ね、「資格認定制度」については研修の充実・強化の方向とする提案が了承された。更に中間報告を踏まえながらワークショップとしての決議を行った。

決議は、NACSIS-CAT/ILL システムの重要性を確認し、中間報告の応急策検討の提案のほかに、NII には、目録データベース全体のスーパーバイズ機能、データチェック機能の強化、図書館システムベンダー各社へ搭載すべき機能を求めることを提案しているほか、各国立大学には、目録担当者の知識・能力の向上についての管理職としての見識を求められていること、今後、大学 vs. NII の構図を脱し大学間でユーズとしての協議・検討を進めることが求められ、双方にかかる事項として大学と NII が共同して研修体制の強化を図るものとしている。

4-2. 私立大学図書館における対応

「中間報告」について、国公立大学図書館協力委員会から私立大学図書館協会に対し、加盟の参加館に周知するよう依頼が行われた。「中間報告」の公表と各参加館の状況を忠実に示した NACSIS-CAT/ILL 業務分析表の配布は、現状の再認識と業務実態把握の素材となり、本来、参加館ごとに究明すべき個別の問題点とその原因を検討する材料を提供した。本報告を契機として、私立大学図書館協会に組織的な検討を期待したい。

4-3. NII における対応

NII では、中間報告「6. 現状課題低減化のための応急策検討の提案」で提案された 6 項目に対して、NII アクションプランを策定し、順次具体的な展開を進めている。

(1) NACSIS-CAT/ILL 運用ガイドライン

共同構築・相互利用の趣旨を理解せずに、NACSIS-CAT/ILL の運用を行なっている図書館には、その趣旨を改めて周知徹底する。意図的に趣旨に反する運用を行なっている図書館には、何らかの警告を与える。館としての ILL レンディング・ポリシーを確立する。

NII では、NACSIS-CAT/ILL サーバ上のログファイル等を分析し、検索のみを行い所蔵登録をまったく行っていない参加館や、ILL の受付を行わず依頼のみを行っている

参加館等をリストアップした。このような参加館に対しては、個別に状況を確認するとともに、改めて全参加館に対して、NACSIS-CAT/ILL における共同構築・相互利用の趣旨の徹底を図ることが重要である。

(2) 外注のための仕様書モデルの提示

NII が各図書館の外注仕様書を収集し、「外注のための仕様書モデル」を提示する。

NII では、目録登録業務の外注化経験の深い図書館の仕様書を収集し、NACSIS-CAT 登録業務の外注仕様として盛り込むべき内容、レベルを記した仕様書モデルを策定する。

(3) 研修の強化と資格・認定制度の提案

現行の CAT/ILL の講習会・研修の内容、実施方法を見直し、強化するとともにデータ作成者（外注業者等も含む）に対して資格・認定を与えて品質を維持する制度を検討する。

NII では、参加館の担当者と NII の担当者による検討のためのワーキンググループを設置し、平成 18 年度以降の実施に向けて、CAT/ILL の講習会・研修の内容、実施方法の見直しを図る。

(4) 図書書誌レコード調整方式の改善

現在の図書書誌レコード調整ルールでは、作成館にかかる責任・負担が大きいため、早急に新しい方式の検討を行う。

NII は、参加館の担当者と NII の担当者による検討のためのワーキンググループを設置し、図書書誌レコード調整の新方式を検討する。

(5) 雑誌所蔵更新への強制力

雑誌所蔵データ更新については、学術雑誌総合目録の冊子体がなくなり、実質的に強制力が働かなくなっているため、期限の設定や更新状況の公表、公文書による更新作業の督促などを実施する。受入継続記号の運用方式についても再検討する。

NII は、年 1 回を目処に所蔵更新キャンペーンを実施する。

NII は、受入継続記号の運用の現状を分析し、運用方式について参加館の意見を収集し、調整を図る。

(6) 図書館評価のための基礎的数値の開示

今回作成した「NACSIS-CAT/ILL 業務分析表」は、今後も継続して提供する体制を整備し、図書館管理職が実態を把握できるようにするとともに、各参加機関で自己点検・自己評価の数値として使用できるようにする。

NII は、平成 16 年度に引き続き、業務分析表を作成し、毎年の業務分析表を作成し、各参加機関に配布する。また全体的な NACSIS-CAT/ILL での業務統計データの公開に努める。

5. 課題解決に向けて

中間報告では、課題解決に向けた提言の基本的方向性として、次の3点を提示した。

- (1) 新しいNACSIS-CAT/ILLのビジョン・理念の再構築
- (2) 図書館評価と新たなビジネスモデルの提示による動機付け
- (3) 課題解決のための戦略各論（外注業者への対応策，システムの解決策）

ここでは、この方向性にもとづいて、今後継続的に検討すべき事項を下記のとおり提示する。これらは、国立大学図書館協会の各地区協会での検討結果・集約意見の分析に基づき、中間報告での課題解決に向けた提言の基本的方向性を踏まえて行うものである。よって、これらの施策及び施策の実現に向けた方策については、大筋として国公立大学図書館に共通の認識として位置づけることができよう。

総合目録の品質維持に関するモラルの向上

目録業務の知識・技術の向上

- 現行の講習会・研修の強化
- 目録業務担当者（外注業者を含む）への資格認定制度の導入

目録業務の各種基準整備

- 図書書誌レコード調整の新しい方式の導入
- 目録業務外注化のための仕様書モデルの整備
- 雑誌所蔵更新の仕組みの整備，システムベンダーへの要件提示

相互協力の趣旨の徹底とモラルの向上

相互協力の業務バランスをとるための仕組みの整備

- システム有料化，料金設定差別化等のビジネスモデルの検討
- 適正なマネージメントの確立

各参加館のレンディングポリシーの確立と参加組織ファイルの再構築

継続的な業務分析統計指標の提供にもとづいた，参加機関の自己評価体制の確立

書誌ユーティリティへの貢献度を含めた新たな図書館評価指標の確立

NACSIS-CAT/ILL の再評価活動

これらの施策の妥当性と実現性を検討するために、書誌ユーティリティの担い手である大学図書館等の参加館が主体となり、NIIと協議・検討する組織を立ち上げることが急務である。

さらに、今後も日本の学術情報基盤の一つであるNACSIS-CAT/ILLを発展的に維持していくためには、参加館とNII間で継続的に協議・連携の場を設け、状況の変化に合わせた適切な業務分担と緊密な協力関係を構築していくことが重要であろう。

以上

別紙1 書誌ユーティリティ課題検討プロジェクトメンバー一覧

	氏名	所属・職名	任期
顧問	宮澤 彰	国立情報学研究所 学術研究情報研究系研究主幹	平成16年9月 ～平成17年10月
コーディネーター	笹川 郁夫	東京大学附属図書館事務部長	平成16年9月 ～平成17年10月
"	平尾 行蔵	慶應義塾大学メディアセンター本部 事務次長	平成16年9月 ～平成17年10月
検討メンバー	栃谷 泰文	旭川医科大学教務部 図書館情報課長	平成16年9月 ～平成17年10月
"	渡邊 俊彦	鹿児島大学附属図書館 情報管理課長	平成16年9月 ～平成17年10月
"	米澤 誠	東北大学附属図書館 工学分館管理係長	平成16年9月 ～平成17年10月
"	佐伯 正	明治大学図書館 整理課長	平成16年9月 ～平成17年10月
"	中島 操	同志社大学総合情報センター 学術情報課資料管理係長	平成16年9月 ～平成17年10月
"	大場 高志	国立情報学研究所開発・事業部 コンテンツ課長	平成16年9月 ～平成17年3月
"	尾城 孝一	国立情報学研究所開発・事業部 コンテンツ課長	平成17年4月 ～平成17年10月
"	茂出木 理子	国立情報学研究所開発・事業部 コンテンツ課課長補佐	平成16年9月 ～平成17年10月
"	鶴澤 和往	国立情報学研究所開発・事業部 コンテンツ課目録情報管理係長	平成16年9月 ～平成17年3月
"	岡田 智佳子	国立情報学研究所開発・事業部 コンテンツ課目録情報管理係長	平成17年4月 ～平成17年10月
"	荻原 寛	国立情報学研究所開発・事業部 コンテンツ課学術情報サービス係長	平成16年9月 ～平成17年10月
"	成澤 めぐみ	国立情報学研究所開発・事業部 企画調整課研修係長	平成16年9月 ～平成17年10月

別紙 2 書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト活動報告

			活動内容
平成 16 年 度	平成 16 年	8 月 31 日	平成 16 年度第 1 回国公立大学図書館協力委員会常任幹事 会と国立情報学研究所の業務連絡会開催 同連絡会の下に、書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト を設置することを承認
		9 月 24 日	第 1 回書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト開催
	平成 17 年	1 月～2 月	現地訪問調査，聞き取り調査等の実施
		3 月 7 日	第 2 回書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト開催
平成 17 年 度	平成 17 年	4 月 14 日	「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト中間報告」ま とめ
		5 月 13 日	中間報告を国公立大学図書館協力委員会委員長館（慶應 義塾大学）に送付
		8 月 29 日	第 3 回書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト開催
		10 月 4 日	平成 17 年度第 1 回国公立大学図書館協力委員会常任幹事 会と国立情報学研究所の業務連絡会開催 「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告 （案）」の提出
		10 月 14 日	「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告」ま とめ 「最終報告」を国公立大学図書館協力委員会委員長館（千 葉大学）に送付